911.3
1
1,2

浚のゆめ 一

凡例

こゝ文百余條より丸ぬけ也まとゝ
顔ふれ国々の文通もしるしにけく
先生の添生に菊の連歌すると侍りの
まあ侍すりへかるし方の稀格にいく
あらし可得もへ家なよと也ふらすて
出まざいきし保を聞てるへかれし
うれとぬかりくるて様のゆしに述
又くてい幸らしたる身絶戯ゆきし

天保九 刊

ましき此の一條いしきちかふなとく
此我情に造次も清人顛沛も
信とうかならす風雅ハ日々の構なに
ありとく生涯より侍きて正風を
一日し我耳し合心柳俳の具浮を
ことさまにれと先誌ルの一章を掛
て綾路いらきり脚ぬと窓たた
すかに尤もかく多う分花し

翁雪園

咲くくく佛おくほぼハ八重桜　峯柱

常ハよそにもの見もふりま旋　玉斧

むり蒼ふ夘と四隈の打よふく　文水

何も角ふちうり行肩戸の　北常

唱ひをそし蜂蜜蜂の哈山そ行　田咲

ときよく風の私も吹おく　素雨

満のもゑおととも寒く月々月　多代

そし浮くくと咲多嬉袖　玉橋

中にしおそく佐かの家の多系て　和里

まくらまても野分のふとん　風[illegible]
降はくはくの雨をかへり　有以
うら枯に弁ふあやめ帽子　得阿
有迄の唐人しくも吟行　亀院
うかれ出て素読の川まて淋　不露
物情も白ご紋の仕神新　栄史
根もしけすれる正愛ふく　曽驚
宗匠くつきし歌仙のことも余　菊雲
菊酒のまく草の梗間　乙[illegible]
あめもまり振まり帆のえくし

末世の流ともくの掛ね
猪備の尚綾なかくめちる顔
雪こもり山院寄の風
読をめくくれすもらくて炭俵
よるしく鍵よ戸ふかし
朝来にくて是て二三寸
つるぬ京乞の兮やす限る
しめりと様ヨ川ゆく山の言
鉢中ゆるみ込く行むつて
行ふ朝月夜もねのもれもら

ゆゝし新葉集の撰く千和
秋中に清少ら連して将頼ん
常にかく様子ならさいに仕合
ららく除けの儀六のうらくと
ふ天をおつ紀元の極やい
ぬまし丸の味成有らく生室の是
さり紀紀筆く土筆満
太帝紀行一巻
満ぶ
太宗給の紀元行紙例の図

さんやしくてんかかくく
り序の言おの博よせ家に
し

享保成のまかし黄山の生ほ萬歎
の序紀京りと出しのきうやむ十四
の心しうろきるらうまりし山谷の四楽
義かふに、ふきあるはうの打に何とし額よ
思ひうりし葉がふぬうしといふ序移成
通れすれふしよりと満佐の子まとゆと
ふし佐那くいふてしも事打中の信と
補うくの便ふ四とい柳井をと
中国九地のあくすあ小く説よ済
のみ字行ありれそこれやさんて高孫
三方うとの高峰としも今く何うし山門郎

かゝる[illegible]一夏をまつ[illegible]と吹し
あらき日の山路の旅の浮泊りうらく
[illegible]しく[illegible]ありし折[illegible]
[illegible]郷の[illegible]

[illegible]古のもの[illegible]　[illegible]

餞別

[illegible]の[illegible]ふたゝび[illegible]　[illegible]

首途

むかし羽州のみちのく宗[illegible]しく[illegible]にも有
今[illegible]の中[illegible]旅立[illegible]宗[illegible]の
旧交[illegible]の
[illegible]一[illegible]

[illegible]のふ[illegible]信[illegible]信
[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]道の
[illegible]
[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]の
[illegible]
[illegible]
[illegible]郷[illegible]

満ちくれ一葉にうつりて草ほし　玉泉

諸国の行脚の中にわすれかねの
まことの花の情をしるしおく
の林に月ありありつかしき文をやるあ
旅の村と同し宗旨とおもへり中々古
特なく情くはしく記猫御
行けり

有るかなくの古巣も見よん笠の花　玉文

ひのまとむの雛へ永くも　玉泉

稲つまこころもとなうありてもて　小花

啼鳴りやまぬ前咲く花の　互也

さほしぬまゆあかり山も月の雲　文化

新気も今日御代ものし猫記　汐三

かりやろし山櫻とびし梢くつさ　文和

ゆふさりの船の上に桶ころ　可晩

一むらの何の物やり小ちら　卑斎

まり山の秋や待もちろ　栄子

ほ山酒もしの松の雪もふらす　白子

おもしろして雨の山ち　机翁

菜園にて大工つくの夕しく建　米情

ちゃに似合ぬ馬も畑なく　忠古

立ちうの茶清夜の低もき　彦接

めくり山あふのまふにあふ山日
きくのみふ咲ぬるも也となる月
其のきりしの正月はくいふ父
限りさはのゝ月らいふ蕉ぬも
夢の光しくに禅ふ光まり
ふ山しに川かる書院りに
ちらくもちしつる思
其庵ふやおの神の也に紙
出しゝ日のしく出ても
大饋亭行一志

細井老の旅中ふ茂
まかりける餞に
人喜ふ中山越しは山も名ふ残る　白子
そ遠ふあまりに日　玉家
晴しぬるえりま帰ゆく　百代
いかりも山の高り出て　曲古
風すうふ詩も香し月の比　秀茂
利きかくの旅と出ふぬ　文江
果てもさきくの伝ふ小笠　舟路
竹ら奥行中も色しかぬや　彦楷

ち押うぬ誠く氣のけふしむ

和尚の留主に梅も梅侘ぬ

しかやもどの被れ毛揃流

みしくしと絵もかくしふ

あけふに角のきよし雨のは

鮮へうちその是見れもさ

梅くつれ賢も自利に住ん沙右

ぬ根もし中山　垣の卯のさ

小ふまんしあけりふれ里のかや

あれ松文白くと本れ立しせ

文北

玄丈

新勝こえし月の光そへても

子猶うに吹猶よんつくり入

ゆけとの芝相好花も中りし

あ影うし我の川流ちり浮

咲まして青く根清き神のさ

安全し之の末々も知と

六韻斎行　一巴

以ての年らし桜の中りに岡しかり

いての時しおとめ火の紙紫と猶く

しよめ打毎の作見すうくかつてて

又とゆくほんえ此国きさりと桜く

須磨や難波の浦ゝにゆくゑを尋まう
帆かけし舟のうかひ浮て松島の景色にのこらぬ
気色いふにたらず風景も見えしのみ
しまゝに紫の雲たなひき阿弥陀仏
来まし松の枝ゝにかゝり四方の景色には
山万里の方もかくはあらしと一度は見しを
物いふ人もなくて只月をながめて言葉も悲しく
ながめ尽しぬ松の梢をとゞめらるゝに

十六夜のはしゐしばし松の月　文小

ちゝしまや深川のとは松にゆくゝ
浦ゝも紀紫硯に筆取りて

まの総や門と探しぬ釈の雪

過ぎ行く紀紫再拝し終て

いさよひやとて会あり老の松　卑然

浦ゝ乃眺めの飛島にて紀行のかゝ
そこし物所なる亡山もしてあらしと
呼ひて

侍人のあまた又出し気もまた　中右

附字

今宵の雪となりて宿り松下　小松

松の峰ゝしなくもりて侍りし　石雀

又信の前ゝにそら行のまゝに三たひと
さしたる松の葉しみじみと宿の
まゝへ出松しのふ物所候の詠もとく
此行もいく

待ちわひき物語又も松のゝ音　杜鵑

さくら時く今朝くらきに神　松英

何やすらむとゐれこふ桐やにほ　尚貞

うかりし行かつき出の日の枝式　川堂

春ふりし今宵も桜の花すゝし　方遊

霞む山も新くれのアしくるも　嵐如

浦しほ行山満しきし沙干潟　尚子

先例に於て花葉所有

陽炎やほしきの言葉のさはけ何はも　蒼地

花人の日月往来山且往ありしめ行成
勧まし哀行よ云くいかしきなりけり
うほて高日さるに楼人静化

へ今もいはなる花葉様の際月かり山に
ゐくらし粉本花の上何ゝ行や山河
の桂花に会ふしすとしあそし何賀の
信州ゑ入れしに来の子あさも情けるうら
此池の風景の桃さきも山さすらむ石の
なかに渡りし梅のとしもしなりし出すと
さらさらまる陽炎の浮としいかゝ於るよ
まつ松の佛僧と添てかまるのを

葉しふ春くてけりむしの梢くまた　鶏柱

陽山高田の桜稀かくも言ふ大家
諸方の桃花郷和を花寺しかしそう

日はへ何しえけへくてとて日　茶了

ふし二三様の春れなく花葉のつと八を
信さらし和と浅見湖にて信海の信濃

ふるき世の高適といふ人部侍御の
四男なりけるが返りてしく気格風流といひ世の
人情を風雅とし秋冬の言ふ絵をのそむ
ことくせりける方は返りてのこと

はじめよりも写す塔の秋かな　雲山

君の手を延べ几中の時めぐとてし樵の
なしの拝氣も説りらし又わが身の
すかをもし御もし花も明けし廻りし白
そらねぶる明しら

如しつく文をの極く二言の情　斉之

首よし笠も星とき気　素家

我殊ぬ手けをめの枝とふへ　定流

うるなのとくまよ也れ　草化

試筆かく月とありけり笹の音も
塔まに結の袖をともしれ
ほおきりさまはれもち郎
此敷くり宮じうし跣るく
いるに参ずれ世の折りさ
むしく今に構秋まる
日くまき候うしきのむ
おぬやらしく象の料し

六鏡あり一折

偏刈

出[illegible]のめく[illegible] [illegible]のね[illegible] [illegible]京

[illegible]川[illegible] [illegible]

貝[illegible] [illegible]

[illegible]

[illegible]の[illegible]

呂久川の[illegible]

[illegible]の[illegible]

[illegible]

二[illegible]の[illegible]

に[illegible]

[illegible]川[illegible]

東濃[illegible]山 [illegible]

玉[illegible] [illegible]目の

[illegible]の[illegible]

[illegible]の[illegible]

[illegible]

[illegible]の[illegible]の宗[illegible]

[illegible]の[illegible]

[illegible]の[illegible]

[illegible]の[illegible]川の[illegible]

[illegible]

[illegible]

同 [illegible]

[illegible]川[illegible]梅川

の[illegible]

[illegible]梅古川

玉[illegible]

桜行旅にて

寒山やむかしはふるくとも白河は　　去来作

ども行て尚はしくらぬともみて桜を
眺くる桜狩の事ありて桜りの花を
見くし其しく桜は面白の所とうたふ
いつ成いつさと行くなく時うたと思し
ちりしく大井の川岸すむ

嵐山やむかしのあらしは桜も涼り　　仝

浪花

咲く見わかれのれとむりくし去来
の月と名残とくれくりけりて
汐干つくし浜辺ていらさるのまのよ行との
朝外さ人に西よりふ遊ひて舟に京の御　　文孔

京

只さ桜らそのむらし日本のつれと京都
再度を付らむの大和へはやまとゆき
桜と光ひくらくと京も月毎に伏見の桜と
なくうくとむらと行くるらむ花見の行よ
あらにさらふうる桶の入津かへりをかへの
桜探くも半まるへきのと前おの宣とありて
もくわむて帰らくとわれ聲くわくうし
とくりるて西へくなれわれ京と用を好くしく
将くは河の桃京明のあそれのさとれたか
わくるくと行て

京の春はとてゆくもあわれに花の香　　其角

咲くしむ其名とも公にるもへは帰る子本
都くみらけるまのつる伴信せく
所在村尚も中にくいくさ此よい
ふりくんかの中西ワ文の隠伏の花の
婦物の冷伊わりくる女は今かさとの
所は第上となつまるて　おうく休みかく

ゆふ風や茶のみ咲ぬる風のまゝ

花咲やはちすもむかし松坂合　す好心

同じころ頃にして給ふ玉宗落合
とも同しの折り一帯世を
あつとさうしめり〳〵や
かゝしきあれ

としとしや花に桜もまだのく　富岡坊

申の六月に諸々を見る
そく六日松本

松中文左

文

花やさきもちらしとはかなき春　玉宗坊

けふの日永にさらにこの心に
しるもの花に桜のゆかしの間

とぞ去年文月の雅なる哉
信の浮きもつく市中に花人を
飛燕の身をさすらひの中
余れと紛しやく江の流れ
わすれし中にも心の行末
あはれもうらなる風雅の間
うし

花の枝にもさく梅の情もし　玉宗坊

としの涼しさや　是叟

高山の初雪にし　紅牛

家中にもまたひとつ　徐直

月のうち鳴くも月の雲　如古

我持の二つ絵のもちぬ　娟二

まんまると日くらし同し様
岡よりも薫くめくし
じやうの宿はいましか雨かふらし
八郎も月影の花朱らかく
京もしらず扇よびの名の紙
松ちとふくちやうが小正月
咲きゝく絹やまかやう御つつ行
花の命名の盛りくれを祝う
打火の乙山をふ様あれ相連
御川や絶へ青もない笑

蕉門こなたがけゆく
中陰しくも又ゆ縞とし
うれしくも宿に待つ乃の月
称あしくはんなぎ春はゆふく
涼しくも高はんみんとさくて御
そのれそやうにふあのみ把れ
見れはふかれぞたてもゆうふれ
至り国在にはる神の花
右歌仙一巻
満御

きてやかに海を得るやと四十年　序

高き名を得たり師の行と心得たる
あまり日ち隠居のさまをおもひ出て
ありしのなつかしさに於て中一とせに門の名
とはいふに信をしとりしるしき
風雅の名残るよの影残り置けり

利きさは谷にしのぶのなみかな　玉泉坊

炭しく揺れしり真　おちこ

照明のつりと鉦とつきさえ　与清

ま台所のさゝくおふらし　何好

枕もふくおくかす月の情ぬ　清斗

覚日の手にあり秋くさ浜水　徐来

出るまへの姿（姉ぶ）あらば向き

けちしれぬ雪使宮中

狩猟かれ関ゆく御と綱ふ

麗のうけらかなし

哀きふ然くれの花の浜

春秋夏の舘へちりし絵

ことしは利きいの花のかにうき

元禄の年よりけり人生よ

松明のさらなとはるる　何也　言也

入院の和尚招く山寺

姉息のなりと伸ひ此白髪

黒海色の浮影ぬかしの

てしく月入るの風の音

僧まや棹とし紙行く秋ぞ

かぶ山らしま京河原の月夜とかく

ほしまれけや山家のまかりとめ　也有

義し同馬田ま次くと見し秋　玉宗

世わ利くまふ名の燗紙めきく　政渡

十夜宿るしの小柳く　徐来

内庭紙ましまま鏡の古の跡　修自

傍多又内のてんとり引き内　梅史

ねとし家ま原く宿で雪の月

破まつく冷行くまま住かすしらめ

かしかに若界の秋のゆくく引

何気く秋の奈良まなり内気く

ここ夜こ家ま了何く待気の後山径

まし春くゐみくとけの道くく

元猶とくく出りまく法くし　之肖

仲くこゝ紙ありちこゝら紙
よりもよし紫の糸も蔦もよし
日光堂小やゝ中の寸法しかも
小紋しふ細目かくくもの紋も
縞の紋何ろふ紗のもよふ
菊垣も出山はれ紗に茶染同
宝常もうさき宮小紋柄
法界の図向ふ宝卿しく色し
の割付しへゆるくとやふれ
紗網の刈鏡のやりてるゝと

米町横山町横町
ぬれ門より本銀ハ奥様ふくらみ
長の形付の染もなる梅
又あいの紗ハ物もののいん
縁ちゑ様より紗の小紋
常の目ゆよ紗の縫やか
東白鳥も可如何與
半ハかりこゝろの縁との
仕ぶしの段もゆくく
童段もとく鶴も今ハ江戸紙に

せはしくもとりさし棹の咄経
神子の懐ほどかぬひとしらし
・情なきおれのまへにも秋す
六字仏行一花

此所は月読あそび逍遥すべし数の
佳景のあるを日もむかふにひ傍の風
為子望の注清一眼界まうけ行と弁
移りゆく根の松竹阿弥陀の南西似ける
取具し旅ほとゝ啼ける
終も見るふ風の音をとも冬葉の頃　玉英坊
生死のうちに言ひ行く資　野波
思ひ侍りて是かうこれ酒の利くとめけり　徐来

舞ふ代くも　粹の九頭
神楽めくし声のかゝきらしかし
あめのふる匂ひの頃くらし
気配りの色ころろしける月の景
かゝるうちふけ大原もすゝ
称名
法の縁をも結ぶかり極まる　紀升
神楽のちかみやおちくと卯木　徐来
其の利や能もしくの家とゆき　好古
露の色よ待り給え行ふりしら　梅笑

陰ぼしの出しも新茶かな　如志

比良の雪解もけふめく時分　越後

西つ文の間あれば竹床に会し涼風いと滑れ
と降まいくらし石の涼風のとを侍
し三里の御涼もりうちにさゝうらん
ととのお花をとゝしと紀くくらし
あまりの風あれ望月の降しかけ

ちはるしに利えのくらく荒蕪　木永沙

こゝろかし夜の伸されさ等　座秋

春の行に仕かりふかく　東夲

被のちまて白の降さく　帯之

涼秋の音とちりつゝ月の秋　京甲

終や雲のむしもつまりつ

若狭の今そふ心にも限

梓に仕合す月い出

隣る物の流れ沢の流れも

横よてらふちり木の月

秋みま家様その色え終

芦の畑の音も夜あ只

里の我くまちのよ奥山秋

降りこえちきて笠の御も

晴くなりし大隅あり迷し入

待さしくけしまくのかく
出鼻は此地は壇の山さきしさ
宮しむしりしくゝく舟商
お灰ちきさもとちきしい間の月も晴き
出代りやりし秋は文い
何や角や言葉残らく左右ゐ
砂地きけしく影くの山は
枝くも竹は紙置の柚のの花
祓の惜れのちきとしくしこの
六額寄附一考

無くかきくるもふ笙涼し　子考
涼し織の衣とそろふ　南
お出度
言ふことも出して はや涼しく成ぬ　京中
落りまかるとも楊しも心ゆ　南
からしく
晴小くれ ひ あるや本下宿　都言
寺の涼しさも仰向きにれ　南
全
月影の影見えて寛しく露は　烏秋

明やらぬ山根もさひしく秋哉　府

仝

ちる山おろし松風ばかり　立正　信多

ふかくすゞしゆかりの音も　府

仝

すゞしさの言葉たえ一入　鶯旭

根もむかし中や哉うれしも　府

仝

ほのぼのと夜の名残や秋のさき

初のぼすゞ色も見えて　道益

府

仝

先ゆくやゆきやまひのへの花の坊　道元

涼しく清水の井に昧し　府

明日ありて一枝に多年の老

涼しく敷居にこゝろ　立思

玉章の押物や乃秋れて

一日

ゆうぐれのすゞしさの秋は　立思

芦にくもりし風の浦の　府

三と〓〓の〓の〓あ〓よ〓〓〓〓 [illegible]

[illegible]

行はそれ係やとらく風車

うちねて了し出こう〓も

〓くは邦とめく思掃あけて

野分者の行と往つゝ

東〓
南
都言
西秋

月〓〓の〓〓〓〓〓月 [illegible]

[illegible]

むしのねにも梅も桜も
色のそれ伊吹をる
桜の岸しはのら桶口節
舞ゆくの花くられは
明くしい川の月中月影も
それまうれ蛙鳴虫の声
生かく行もてくし[illegible]
信々可結の方山々常住
秋山しりそもしの花こて紅
四ケ月の中るる御櫛の春

六組[illegible]一玄龍
[illegible]の字の[illegible]をふく玄龍
新結の[illegible]とゆかすする[illegible]
先の[illegible]一行の[illegible]の
とらぬしれをの[illegible]
ちらぬく
人はの[illegible]も[illegible]くく新茶かな
　　　　　　　　玉泉
まつしもいしかれ[illegible]　玄龍
お花の[illegible]も一兵[illegible]
七夕[illegible]の[illegible]
[illegible]
ねのりの[illegible]も日りいとさ[illegible]
涼しくりしくうえくきつ[illegible]
　　　　　　　　玉泉
　　　　　　　　鳥水

炭たきや[illegible]の飯しめりかな
小稗し稗に神田の使
こ行あり神の鳥のさけふさ
庵とやまふ石の夜ハ稍
掘金まりしの陣の月に照て
新酒はいさし良を許す秋
右八句者
薬くりや募りてのもいまあり　立田悠
振抑くとまいりまへしや花　篠状
人の日ハ彼とたらとて山館京　希之

あしらさぬ山もあらぬ紅葉哉　貫介
惜さよやよし名月の[illegible]　玉家
おち坂
守まあらし吹く風の田の畔　一嵩
尚あも浮くさ落の山行し　玉家
全
供あさ石の蔵さに道ふりて　可竹
風の葉も吹ハ葉り緑に　玉家
ちくしく
新田見うや石の絲の門多　袁路

糸も引く〳〵露の玉あそ〳〵　玉琴

西にすむ寸月山僧の玉葉の遠き
のこゝろ柳あたりとゝの地にや俳村の
村しくはよるしさも夏もれに〳〵と
くや山さ花会よりの神ぶり〳〵の雲へ〳〵も
述てぶ〳〵行られの札ぞこし〳〵に中も日
まの落ちれかさしえ〳〵の一声すときゝけ
也く此れのおよひと申し〳〵

うまれしとの空に〳〵ぬれ〳〵なる〳〵　行姑

ねさし〳〵石の涼しき山同し　玉琴

おもに〳〵鶏のさ〳〵〳〵さへ　鳥秋

いりもそら〳〵山寺の〳〵の・　希言

秋の月さしこむ〳〵露しられ　東谷

ほたるし〳〵の峯も高根かり　立黒

傳あかし磨きもの白ふ雲〳〵の篁　子泉

男ほしい〳〵つ門しくれなく　傳旭

蓬生ふ菊菖蒲の桜哉

御代の花の亦も秋〳〵さの露

たきこ．のれ一声

お志暁　庄右

折の花さ色にふ〳〵嫌し風の音まで　高江

そよ〳〵と婦しまれ　晨

南

おも影

むしの聲とぎれとぎれに菊の露　鶴乙
笑ひも四つの情かの秋　玉宗
仝
わのびや作りて遁したかばき　如梓
ひとよの風の音をきく　商
仝
月花のあるじやほしく立春　為秋
明日は我も又折路　玉宗
我老くも行灯もれ露の果　東舎

高山つゞき神山とすみ也　如梓
亦きく見る絵はいの子を受
さしさいしみ宗あ見れとも
木の姓と笑とまくら枕は
旅してた揺く作る。一え
深淵の僧よ子連。寺も好は
岩のり柳の谷ちまでさ込ん
ねくも吹ふしの花作る
松山作るの萩入る所
わすれがたみつくゆきまさりて

まれ廊下の窓も小からし
ご年中の社かへりて昔く
翁て為の鶴に身を染
構ひまて垂りたるは掉く
家のしらぬの傘もふりまく
践きあり寄まちかく月影の
小僧の連に誘ふ情柄
旅宿しらば何はかへくれ見え
あまくも様の旅姫埃く
紀伊も今は笠もあめ門くのあま

肴わすれ鍋も終ふけりの味
古き夢行一党
名与
印の出や余所へえさきや那ゆく　宗旭
ゆきさ机うしまる世を書　玉翁
氏くしも言大すの手をかくく　花路
かえ花のとく解るらく　東谷
来りむ花にも旅色のしらくふ　青苔
そのりよき色の梅咲く家　法戸
あり桐も内ある魚月の草　糸出

時候まめん御地御家く 寒中
まじく候家の嘆の折ハしめ それ
省くく下りて隠の様くし 帯言
いろいろ見るも見え待の結 手学
茶間乃小へ御らんあれ
偽もせずあくもせずの明和館
御宮の社の名く隠く
姉菜の花く祝宮の今和中
仲春白うと久しく頃らく
行おもしく飛の中くの飛中りよ

心小く心労られ隔も安日
ちりれく隠きは本の御中川
まめ御ふく人の言をき中しさ
候く何事たる女待の門しくぶ川
知らもかくらに御れ多き
むかし白書簡の今和ともに
御慶く礼さしらんも礼
ねぬ昔武士北頃参さ山礼文
あらしの嵐持ちし丹
緑日の申中くろ小く御令青

かゝりさ船も憐ぐるゝあし
むなしく過ぎし雨も晴れけり
テわ霞の浮しかしくらき
道頃の花ゝ言葉の中よりさ
並ありしもしけくしくさ月
左紋亭行一村
右主映
湖の水の流しつ出るの日ながら　子規
あら嘆ある家も草の声
全　南

風の海の捨たるゝ家も人も　兵雪
秋のやさすよ縁の葉に柳　南
全
ありし花して世や言葉の花りさき　廿 たる照 寄子
茶屋まいる風まつかれ月　南
全
花り原に来る落をなりぬも石門出　廿 十照
ゝほよ深山に御出旅もま　南
以後よの同志に好る中風をのなくと
御くし実節の分行とならずよさぬく
歩行の通くと新た四年の風流によりくく

其しのゝ行くくとの宗匠なるもなく
うちつゞけ草山につゝし新柳の残る深く
おもむきあかつきふかく印形の此もの
しも用ゆかしくりしくもうものならう
うらむ佐賀にいふはこ市の行徳なかに
まさかいけしらうらにてけ御月の其まて
ひとふりを

玉家侶

並しくすん山の出ん月残ほとゝきす

梅かゝに残れるの庭　東中

並嵜に雲川の花とり出れて　正在

栂さうひらく人のまふるく　同声

とりくと風も吹すむ月のに　京今

嵜の柳の影りく條かな　帯古

山寺の桜や居こいも山中　子亦

娘のはふ児のふりて他　立翁

余所の宿は佳らくて小峠き　玄角

ころめく雨に埃くたつやらく　亜秋

咲うつれ花も桜としれぬ　寄子

觧しく寺の隣に波かな　康友

孫ともに年のよふてる

岩ちころかく別流何はも

まふくしと室の花もその宿

さくめ公宗の蛍にてむ

仏音も焚の但しくてふ田ちらし
そよくめ竹の光らさうけ
うけとうしおやしうかうさ月の影
柏るうけら宮らしくゆく
やしきへ出家の戌ともうね
さわしく山なり村
こはしもとの雲のさい白ふ
月ふよあとも憑ぬ字よし
おき吹
時ともさく今宵少路め活秋　残雄

涼しさ将よ猿猿とも宿　南
さ真
かし国ふ椿と網やしや茄の月　治芦
あうすしさの節よ悠秋　布之
まうらう車ましうれ舘に　子東
銭れくはしく出しく　笛仁
極さまこれし今宵の月新　雪中
なりとわけい虫の家流れ　支吉
行あうし待うしほへ口ちうく　主器
しけ淋しけしくもうさ竹の宿　栗介

おもくかりけめ猶のさむしさ　玉盛

きちこ待子の宿も知る日　亭明

いうらぶ卜こ家守もきしこりける　永山

草揮息子の今子日足袋　左れ

豆腐包く集綿の使笑いかくて　高秋

ちょむ降きの猶いぶりれと

あのぬしの岩ふもさふしくしと

紫しくしろて和津の虎くま

待ぬしく何ふ狛とさしく也つき

宮ふちしなうしこまよく茶器

猶る房ぬ年のなと目のれ

刀やらくくさ見お花とも

よとれいあお店の訪ゆりせ

狗文舟ナ天の根日

一宮木祝子おらしぬゆ家して竹原と神をめ子りとさしろ猶祭氏正直写のうきま狗ふれくらぬとくらしの之部うい えしくとさ了二位の悟しく若てみよ信くちよ絮しかりてうて当の新作まかのよくの太め辺のかとむ幻うれそ　玉余住

ま柳や宮も元まぬ石のゆうく

猶けい茸なく風の来るさら　玉盛

一しくれ雨の音よりさひしさに　立題
　寒きよの夜をあかしの中　宗子
これ流れ行しに三日の月　露中
　しくれ今宵の初に　呑
去り行慕ふうつりかはりゆくと　東令
　西より行くのみの月　尚石
倒ち御雪のたくの音より　一葉
　越前よりくる御酒瓶　春秋
めくりたれわかれとも咲今　乙花
　おもかけたる今日に人の別れ　其角

ゆくえかわれの住まいはなし　去風
　あれこれ年々の初心　当水
いつの間にか月の行方の如き　求心
　見ゆる行の雪の心細き　詠安
右一紙
独吟
そくに笠行く旅の空　しほ
　そ舟やまにの横も扇立　一葉
秋ちるのしわかるめそ　尚石
　新さらく笠さけ月の雨　東子

すゝしさや帆しほにふきし霧　高秋

よるしさにおれは椽の暑ちる　潮月

いさゝけおゝるの露やさくひらとれ　三竹

まつ風にほろゝとおとやりのと　守中

しすやけの雲たなひく山の木下闇　文山

若竹やかるの風も涼めのり　其雪

五月雨やすめもおよねと細　玄盈

すゝしさは涼しさかしさいな　東枝

風薫やおちこちれ波に水の綾　幸舎

岸の柳もやなとしもふかみの秋のみ　玄罷

おな時

風薫るとめきしすゝしかくも　一楽

よろしもあきしふれなりぬ
かれしく　市

すゝしめにふ秋くしゐや涼しさん　東風

よの末葉れ里に秋の宿　全

雪舟名にに一字はおれてれに松のとくらしに明けの朝をと涼しさ　玉兎信

菖蒲さしてくゆきの雪は
涼しさや夏の風のさけ　東舎

新かゝる露に稲の穂さへ　鷹秋
月かよふるゝ川の秋なり　ゞ妙
捨られの小袖と成よ生涯かな　古道
こゝろあらはまつ見えてくれよ　菊枝
いつもふふ柳に吹月影も　蕉松
さうなるものすゝしかつら秋　因斎
右八句書

ねのゆーし　二
仲秋初の五日
けふの佳節のまめやかなるとて　菊谷
天狗の二子おしそふけしとおもく
ちうさ亭に行達とおもひまゐらせ候
さくれしの縁蒔や折おやゑ　玉泉坊
やらくゝまたすゝしれの禅色　菊谷
おもこなつけれし市岡勝ってを　乞九
右絃辛師米書
けりし他にくゝきとま　出郷す
十一日
武備にとゝりて見物の宿に

しこれとて[illegible]の宗祇とたつりよし
庵のしけりしに松と桜ある波とそ申せし
峰天上の月夜ころやさし月との景を画き
好ふ故宗匠のさかとてしむるもの[illegible]
風の音やとおさいと云川ゆく中に　玉宗法

やくし[illegible]　涼しく　遊れなる件　和佃

玉宗[illegible]薬[illegible]
[illegible]

蝶しまふ[illegible]れ松影や風薫れ　破笑

しつかふ月し[illegible]夏　玉宗

一字[illegible]昭

夏しの松の雲森の森と気ハさし　玉宗

気[illegible]涼しくハ川とも　乙来含

宗[illegible]湯のりくと云[illegible]社中の[illegible]
[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]
[illegible]
玉宗の式[illegible]
[illegible]
[illegible]
信の[illegible]
の[illegible]とも今[illegible]の[illegible]

若[illegible]中に松の月の新[illegible]し　玉宗法

けしきは[illegible]く又[illegible]の[illegible]　子良

呼子[illegible]月[illegible]山老の[illegible]入て　芳松

立流春の尾[illegible]も[illegible]し　鶴秋

一　押切ヶ原はかけいぬなり秋　渭北

冬枯や山さへあはれ暮く　来示

二日月に置く露らし夕日の月　乞化

空も見れの露　かまの露　等帆

来て世ふく宿おやくも置くで　寸中

日永くもみのしふし樽に　雨律

芋待侍は何申し見らし　今始

枝くり柳　柿に水つき　当水

千鳥の此けさ称の口鞘し　東枝

おもしろや山も木の中まで　東子

く山くも氏や京都は拾しかね　菊石

此くも金の時雨雲かなくて　一京

鳴もにわとり陰も井もねて　情芳

水行のか山の秋も見えなく　東今

行さのも秋日をしらべあしき　高雪

春蛙れ京　立慧

伝ながのたなけよゐしめよもを　子然

千よかくして雁さい近底　東山

子のよくめはのよて雲に雪の　玉出

谷宮山し住くと後絶　其市

[illegible]宗祇宗鑑の風を入[illegible]
[illegible]
[illegible]
月[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]

[illegible]やうに[illegible]の[illegible]の[illegible]
[illegible]の節
人の[illegible]て内[illegible] 房

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

中晴て[illegible]涼し[illegible] 房
[illegible]
[illegible]の[illegible]の[illegible] 桃[illegible]

かりた[illegible]の[illegible]しい[illegible]柳　　去来

ま[illegible]連らしく御おりを啼す　　赤間[illegible]

十六日

[illegible]ふいもあらし[illegible]
[illegible]行中の[illegible]
[illegible]風[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]
[illegible]池の風[illegible]の[illegible]
[illegible]京[illegible]
[illegible]にお[illegible]
[illegible]橋の[illegible]の[illegible]
にすくし

すゞしさは[illegible]梅の月　　去来[illegible]

わすれじ[illegible]山梅雨の晴　　[illegible]水

夕立やおのが京への道[illegible]　　桃紅

むしのゆくへにさて[illegible]　　[illegible]お

[illegible]の[illegible]中の[illegible]　　葉石

[illegible]しもおのゝさと　　[illegible]水

[illegible]　　其川

[illegible]立て[illegible]　　[illegible]

[illegible]の[illegible]今　　[illegible]

[illegible]の[illegible]　　素[illegible]

くし山を母の常と尊しく
正成守くの神を今せくも
る水の称にうけら年号
公卿の卑よ哉しけらい泪
伸く世うの文も世行秋
え色しの小形しけ啼けり
ゑの色も多楓の枝うけに
新焼らけし入日もうつろめく
中々梢にまつすくくらうる秋
しら梢すくふも千島の刻消く

ちらは宮山や川ゝ末のも
さくしよりうたにどの雲
梢住よ錦ふあもしく山す
おち晴
信しきま花ちいりとも　白秋
移り出すしく嵐ふ吹　房
仝
わすれし聲の名うたに鳥のこゑ　東水
まやしく眠る餘もすみ　南
仝

打ゑの月に涼しさ四人　其杞

うちたゝむ扇にかへす涼さ　布

仝

御佛のうつりや鏡もかくやうき　梅枝

料理しこゝろ晴く暑き宮　布

仝

ゆふすゞみ夜涼し山月の影　季方

梅雨の晴間と寝る宿　布

仝

すゞしさや月夜役の夜中哉　宗川

酔覚ての風しると涼　布

仝

なかれよるかの岸へ次第に月涼　其桁

我れ風しも秋の本山　布

仝

ゆふする風の音やうす衣もし　宗堅

ぶりの落ちて又と来る暑　玉空

夕影にしらけて暑し　竜秋

衣にて秋もおしきそう夜　枕經

掃ちよ秋地よりつゝと掃風の　如遊

うかれくさも色ハさえ　寝く　芭蕉
かうまゆきしと始ハ月の芽　季友
雲の戸に思ひの明り入けり　宗川
若草の出ハ門松くきとの日
どれくも月川お香ちつ凉く
梅も中ても澄ひ妻訪
分のやらしヲに成りさの風に隠れ
かりひ芦ぬ柱も吉切
清水ハ清水汲の御法力

東ら籬のもた花ちれ
咲ものもしかちくさくおも
このお代りに嫁入とるくふ
けいうりと手結く酒も久しく振
木山つくハ宮ら生ら
一むらしくくと縁内
今おハ中ら義の教くさ
まくるひくゆるくとも押ふる
神の刈ひの宮ら戸らも
ちるも又今和の帆も碑

柏のよ寒さの俵伊代
押られた汁ゝ言ぬかや義
悔りくりゝ侘しさめて
喰さのも畏りさも曙月
白露晩きのそゝきうそされ
うねゝ寒む事も真あふと淋しさへ
きる日くゝまして母とおかしく
焚く柴よ見く葉の笑のくまゝて
夜我礼にかし僧の哀さ
そよいゝしこく立まちさ花の頃

わしさの色　わしさの春

以分めて御ちらぬふつくかくまぜ谷に
きうしみく宗匠の桟頃はしうかし
赤坂く

新家もあつさらゆつゝ前の水　露秋
住の訓ゆくの物ならり　太宗
泊めさらさ峯ら起こく暮さ　菊宅
あゆし汀に平の悠く　花吉
雪庭の付もさらゝく雪の月　梅経
柿さ扇く狙の宇久れ
速寄しくの楽しみ和尚らし

比山ゝ雪も　昔くさ
山ちの傍をつくふ帰りて行
瓦舗に竹を咲もみな
が高としかしかも内のた
ちかけ表のいつのまや
布とおし九品蓮の池を見る
わいしのもるて　酒の桂
ちしれの花とて寺の東書紙
毎日咲とれ　雪の梅ゆき
しくしく路たふ　追手して山へ行

お稚児よめに　一際あ子
さしふ咲まみえて窓の月
行かひくくちくしあそび
白雨しも東海そらふ不安よ
盆の相手よりたちもとる
四の刃中より御の花こそ紅
めしし月秋の小酒をき

廿日
紀伊の虎ほのちりしくに
伊勢の人も言いりとや行地
おちりしくとそれ正門の風わ大
お世しく咲けるのまつ遊びゆく

これあるは東門の[illegible]
し士農工商の[illegible]
[illegible]の風雅[illegible]千[illegible]
俳諧[illegible]の人[illegible]
[illegible]柳
[illegible]
[illegible]の[illegible]

清く涼しけれは日も狂の[illegible]　東京坊

稀に出る月の曇れは[illegible]　杉風

芭蕉の[illegible]　呂秋

[illegible]節の[illegible]節　桃鯉

[illegible]も[illegible]の[illegible]余[illegible]文　蘭令

酒の[illegible]　京想

むしつ[illegible]新[illegible]の一家中
石京石の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]雪の川[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]の[illegible]

遠浅よまて夢待の雨しからさし
今くくと嬉か詠さし
こしゆのくましゆ四の月の光り
かくら[illegible]の村
年よ似ぬ大将従軍戦ぬい
うしつ相識ふ相も雨川うく
そらうつのども専ら完さう
青河ふあぬ名の野し

[illegible]

[illegible]

松葉ちりて吉野に掃すてし松の友　玉京侍

菖蒲やなるは風と山時　千郷

磨きも幾代の祖父のまとゐかな　梅紀

吹めぐる塚からいろはにふるの　菊舎

てらさるる月も限りなし照らす　芝吉

花ともたまのまかりかなし　如柱

囚会ても粽の存らさるに突臭　色秋

ゆふ〱と浮けく風経てそれ
ねさらせしくやき絶しく乱れし游
八重山まは梅花の香しみわたりし
嵐吹 烏水
山ちしれ花に葉も葉の色のこ
また耳をふさぐとしも次 千陰
神楽の竹も雨くしくも風え 玉葉
我身も老としし 花枝
さり侍ふ言ふく姫妃の錦を押 桃紅
雨ふる雲に入りし横吹 蘭令

湖すみ月くもらしく千代
そしの本の言よこりもて
お牛瞻
跡しれれちら浮びしし五月雨 百烽
すししきの鉢に入りて
あちこちとわすれ世の中に
なむしもしらて浮ふそそて
とけまとの住もちらし花月の
かゑりうす庵の入浮く名
末多寛しく余体下御座

お言略

ちしまのかや […] の千鳥か

行く […] の綾涼しき

[illegible]

常々まくる試し雨の宿　玉蕉

梅雨の日の […]　貴秀

松玉香樹 […] の […] 　玉映

寂 霧より […] 行き

旅人の […] 寂月 記

寂 寂の […]

小春月　寂月

[illegible]

ゆかりの奥ゆかしさは巾に雲ふ
のはらといふわか庵に何も見え？
ろみのくらしを夜もあかさくは

山寺は涼しまれほとゝきす　玉宗

おなじ時

水打てくちしやる月清　露東

浮しまやむしく涼しさのな　南

仝

月涼し宗川の水も見　何承

四つりあとと夷柳の露　柳

廿七日

梅林は中山にありける三十日ほとへて
ら涼しさは白く山月の七ツ過の
日和はおほはなれく金沢は式大桜の里
ありて里のほとりは峯すくらし
明月かゝりて桜の風しくしく吹や
ましぬるゆかりの中に

桜子や迎へて桜しきていぬらん　南

茶ちらし桜さそふ山中のたよりなく
さめ池の里涼しく風くるしくありく
おとりの日行て雨と河のとの音中り
卅のまや前るに神あのそみた
あらま待ふりのやりける

ましみし前ともこく桜宿紙　南

いぬさ若くらしもしくにらし空ま
ろひくさ縁さくらしも出くきまうり
大雨篁はみし草神はくきく川くの水
跳り越りもあくは越する地庫の跳ける

[illegible]

[illegible]

[illegible]

二[illegible]

[illegible]

[illegible]

廿九日

[illegible]

[illegible]

名月部

そらのくもりも全体に一面の雨こそ
なけれ見るもよけれはなほかゝやく
わけ行くも宿りもあはれに打見
田圃の能頼くもしきは中の月と
打しき人のかはしらぬ折ふしは

秋川や畫きへふるへる露し　　玉露拾

ゆるくつくしくさき寄月もきし　　老し

峰入の峰ちまて見くるしきへ　　菊含

いつもだ何そしの紙ひ　　野暎

小山ほと積りて果見る牛車　　法てし

ぬなふ形くしいつ母ら額ける　　元円

根こそ聞かしと秋も又暁さき

当日もて色て陸雨くしく

珍しく宵の出小坂の下

守むより白くてもしゆしの

寸のとほくなもと行く言ふ夢のを

深性何ほも是ちとんと宮

おいろ添くも媚系の手に深

清石お白の鎖りしめく

お蟻も花しうりと宵宮く

やと小宵の月山　宵川

清酒のたのしみ切なく桜鮓

女房を芳兼ぬの花曇

山の端は秋待くしく夜の月

吹かけし秋に荻も転く転く

芋ならず仲の芳陽のうらゝ哉

能登しめしけよ長閑酒

咲体しく咲のうるむの寒しけ哉

晴は名ものおもひ絶然

お寺晧

廣山やきえふしり秋もわり撫し　菊舎

桜の咲しの国とこそねみのといふ字宗
らし給ひとしの名花もかくしては岩井の
月の末このとゝ為しくらけしたけるに人も
京中の郁ならずうち語しらしを揺き
見しとて和もしめ宿のかくけ浩てとめと
ちふくみじらくもうちらぬ仕に同わ
のこゝしも南しめの流くとたしく書ならくしも
同和めくもし存くるしく小肩とふたさせ
わが成うしく信仰よのくしくれ宿りは
けうらく秋も和のらくそうしくこてい多き日
らくりり別

南とのかきもさわらくて二月月　玉宗阿

秋りとくらよまし行しに　鼎きも　まわ

以春とし傷てつきめなたしへ　路啊

白しき侍よ行らくもしく　菊人

ふるさとの花さかり田舎を
男はしらす葉のむしろ
小松もけふへおしき小松を
内裏の猿おもふるはし
むかしは松浦山の浦もまし
ありしにかはるかふは
いつもとはまりけり緑のむし
歴し桃にもむかし
出川は京都新しくとめ跡
植の枝の実せし便りも

くのまつやまてぬつるふる
鷺てふられ扉の残
同じの火の中にてはしくし
さくきらつ雪の月の行ぞけ
きらめくとくの氷ぞまさる
おもひ侍るあもね年ま
住しの町さつき田は浦の
それも中とりすみそ甲
薫そかして萬ふたとの里
帰や陸の名も錦し

[illegible]

むかしとなりし[illegible]の[illegible]　よし

[illegible]の[illegible]　[illegible]

三日

羽黒[illegible]の[illegible]の[illegible]
の[illegible]一[illegible]の[illegible]
[illegible]
[illegible]の[illegible]の[illegible]
[illegible]

[illegible]川[illegible]の[illegible]　[illegible]

四日　羽黒登山

[illegible]の[illegible]と月山[illegible]赤川[illegible]
羽黒[illegible]の[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]の[illegible]の[illegible]
[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]の[illegible]

秋の[illegible]や[illegible]羽黒[illegible]　[illegible]

[illegible]の[illegible]羽黒山　[illegible]

[illegible]秋の[illegible]　[illegible]

[illegible]の[illegible]　[illegible]

[illegible]の[illegible]

いさゝ炉や松のしめしの温かく　暁

同日

高瀬

金中の大雨篠とうつし袖とくさ
中しら術の千原今又にしく石めうら
芝時の日はあらく母中との作印よりくかとし
みくらめ一ろうす中とくしけりくさ気をとぬか
増をとおめす酒掃除ろり演歌作の光さと
やうししつて一一年天寿彩寿き作く

せり細うや山も紅葉も石の秋　木家信

秋らく月もわれしの晴　作月

用意深し吹ぬ野分のかしらく　菊今

年の須臾に酒のあつしく　雪台

寿行のくさめに行　冬寸き　宗山

ときわ氣しもうけず毎日　琴使

萩かはゆくはれめのうちなくに　花渓

陣ふしくさてく鳥のもふく　芝牛

おはりかゝ彼の横頗とりかかる　古僕

口ならすゆけく花くさ氣促

まづ〳〵薫しも芝の吹く松山

看ふ近く若くと日の

前と青の立ちつ楢も行ずしく山

五十まふかまとくもまも語くつくす

きれふしくも氏那寄らきく国ら

寒ふ節もおもしく松もおすさ

誰の仕てたしてもかふけさ

若しくふる嬉しかとうしろ

みくみて山落の若月秋

こふたぶしんもしの帰るさ

行見に残えつくすの浪附哉

錦ゝこれきるをとくろ風呂の雨

今宵ゝも志呪てしし緑のむ

ことるゝ孫生の空のわれやら

七日

打続く雨のしかやにて源氏の名をおふく
喜舞の人ゝ二星成にゝて何かあかさい

笋も衰てゝく宵は借す宿哉　角

お星既

かくの蛛しらかくり草の露　何明

夜渕ほも待ぬ月の名々　玉宗

式常しも嫁とぞくる何しへ　芝睡

ふしぶれの帰るもまゝく　琵睡

今宵中ゝ風月ゆくもいる世あろく　女柳

何なりしも常を下戸道　京紅

庚申のおもしゐの嫁(元)はそく　李白

何雨ふりしも中ひとさかりなり　玉之
謂へるに飛ぶも橋よ色しきと　牡女
ひとすらくのむしらぐく　布谷
明くれ住き仲冬の空ころ波　雲峡
通りしく山しく平山絲に　渓秋
其の中にゆきの中にひら翁のゆく
お涼春の巴も老の佐さり
明けゆくさらさらぬ良の長きなく
ホし宮の峯の京と雨の下
コノ句ヨメカヌ　嵐ゝきゝれし一きすゝ

あぬかとろわしの寄てかりけり
さゆく気おなお柿に月の酒
お備もしらと打ふ出れ秋
ちいさくなもあきと陣下の木相
名おゝくの所はの音物
四のとも吹らいゆれ吹く庵の
おれ中座も令もし絶く
八日　芳太郎　宮和
おし気くも寝くれ和嵐　新助
種も花れ打も淳しされ秋　玉子

花のまも若葉の月の酒屋まて　越雪

ねころびてあかりし帰りさんかて　め柳

ご免ぞの馬くるしくに　菊舎

けの言ふ声も扇の物言ふ　京[illegible]

出まけさふおの法春しめしまふとくく　竜橋

若の川雨のさけ法るもて須さ

得申す御くつろ留須きらし

あわしくさる京の市葉さ

言ふしも宮のとど先吹也

世の利くきも正風の表

宮家の郷中の亭にとしかしわかし

夏のとぞや来てりつし伝くれ　南

[illegible]

さらしくと松と結くく旅の月　木[illegible]

あきとささやしの若葉の夏　京菊

きえたゞ入りかねつるかな　前宰
ゆくくのかな桜ちらむ　のぬ
雨ふるも比叡の上にふる川ミツ
ふしはるくもるも室や　宗英
えしぬ清章の供のまめにし
影わしかくのかな心あるらし
ことゝ詠りし山ゝ末はるとも
仲春を柳翌を初しの
書きふりゆくて節のを、
ゆりたり時除くの新

前文映
行ゆく続くの池の月かな宗子　宗珉
うつれ縁をすゝしきる秋　不可

花ゝとつれぬ月の影をしたふ
柳ちる時の寒の花て　高岡

十一日
ひ池の月かれぬし桜の花し
ふりてる月中るも宗かり桜
とふる雨你の内ふるくし様しれ
行雨の余ゆの桜中かと主まるの信
つうれそふりたるのきえも旅く蓮
茅か紫内をし一夜の記

あくと卿りしに二十つとよ乃とあれり侍るよく
孫兼風るのりとるに受くくのおこに
くく而歩と衛くらし据行るらく風情
詠る似仰くらうわつるよくふくみうるを打
うらしくそう後心門の東すしは初なりに
宗のあけ耳しれしふく寂しおの一ぜよ利
おもしいる

萩咲や町の和らぎ寺に　小宗坊

おもへはけふ月のれ　孤吹

待宵るる月の晴の近くして　東仝

此れ示ば笑しく也　中岱

川越の侍るふるに成たり　玖史

後く集るあ中ら哉る　孤道

行灯の小田家ば笠も蔵し入　京作

かるの水しるばるや一ッ記　青武

見らん橋に野きる左台ま　岱水

引捨くおく年の手の　杉蓄

晴る日和る日る雨中　月池

陰ろしれ侍るる其　其池

衛士のあちこちかくく左新　杉化

しま世小路の花かく小倉

嗅ごしさこふく帳のの耳さそく

一垣ふくと持よる子ら垣く

その前書にありしさうに

おしへ涼し誰の秋をもさかふふ　宗休

あしくりし月にこころ涼し哉　南

蔦くしき無ニてしい酒ありけり　逍遊

稲くしくたをけれとおもて　岱水

おゝ待くしちらけりし秋の露くしあけ　象金

秋つさ秋にわをてあらし　素化

皓しし月へちかけに晴れけり　文狂

めつらしに雨くしあもあ記　化同

鉾のめに天つしくれに吉生　孤岳

巳下三代宜が定稿　文雪

今しくまでの雪吹くの西山　孤帆

ふりしきつくしし際の雨しし　素秋

子細りしお思入のあひ哉しし

流れさくて月と見てまき

こゑしの木細くく篠もふく

川向しく風のさしく

わ粧家の隠れの隠れしかし

住のく宗けりしきき

立ちかくりし二丁目のゆくこまく

小円の咲猫の刈しほるゝ
添もやあ芳合すふ打おゝて
灰となむちりしを女角を
あしつるゝ役目ふ五の花
千里も定まらぬすの空
前書略
寄ゝすしまゝ新ふ又涼し　栗全
まゝれ新に月の芽山　孤吹
はやし芽も三つ家ふ写す暮を生きて　京紵
あちこち曲ふ戸山深きの　素地

出すやしとつくまゝ位き雞の面ふく　素秀
艾を定まる着く借りもし　示系
けふりの思ひとも夢れ土用和　孫窓
渡もあらしく貧息の咲く　几園
追ふのさゝしゝ所まこすき刈かくと　竺水
落く涼ふの丸成ふりしと　秀吟
なきとふゝまくゝ曲の坡も哈あ　松花
雨もあらくし聖日ゝ洞日　村吹
掛ぽる橋の半綿の打書借　梅浪
和尚を世界刈て枝打

きぬ縫て候に頼さくるならし
鍋の物ならけく汲やし
おしけにハうちもとくもこ盛り
押れ帝に宿るかれる宿に
起しふく面因もふるき又おね
元伊己にすりかしくは通て
行や角やならしつの晴行帝
いさつを行るもの侘びすまひさ
おしそくぬさましもつとて御返て
宿狩女官の為奴つましく

峰なしともなく寒すに
うしと稀なる事なりの後
洒作りしく来稀の報の御神ても
宗くなる思す宗もまえく
何やくも参りぬるに月の内
えくなからに風の吹くく
すけもちし章の稀す絡も帰
す有とりくの京に出ししい
ましく又伸くとめて更に遠く入
つりしこ衣神の持ちうつく

をくりゆく時雨もちかし深く
すゝきのやうにおかし月の夜
十八日
残りぬ露の紅葉なに今　孤匠
枝実も作し月の清し里　有
雪に連ゝ子ゝ中への残して　泉氏
吹家の蔀のしぬく　京依
霧を行しよいゝ洞部の小かしさる　紂竹
代ゝ見たゝ鹿鳴し松原　巴峡
横さつく江ゝきゝゝゝ一川ゝ山　是化

余所とせ
あゝは雲の小紅葉の面　孤竹
田くしかけ阿くて女房は包ゝ織
そゝくもゝ川源平帝
山寺もむの風の外山く
ありあさきの楼浪やてし臥
じあいすか阿かの門くに
道阿ふかゝゝ出但又
あつちにきてもふぬあやめ中
道ふくも又蝿の虫しく
茶平いゝ不能浪しの一跡竹

きよく〳〵の首う翁の称さく
梅花ハ今年日の影もいか
分春くらしの字にぞ花
面縁ぶりくかち也けり
ふけしむさらく翁の墨跡
宗匠も集りし娘縁堂
神と御し越呂の縄

梅花

梅もしやふも行く又神まつり　京竹

先も月もまりしめ縁か小家哉　孫岳

芳野の翁折らしや御神慮　京流

梅ある衣も姫梅咲やまくらま　雨峡

咲くらし練の家もそこは花　巴律

新や言めくるるふみしいきさ　野峡

折の梅の若草の鳥や蘭の花　青化

於大峡　雨峡

行傍し呂も新て日和哉

信くも梢も時折跡の秋　東家

咲菊を玉の光の家かゝ梅く　野峡

月の行く折縁の夜ふ御くも　京係

月限りの燈よ上傍らふ門くせ
とし口のすい流先生
孫らし亀の青の今年らし
山しく山の門く山は
煩悩の数く門よ初世行は泥
女育のくしく人ら言ふりら
打くのどもめぐよ節白おか
水山口御の水山まる山
築田のさぬ子らし他ね笑てくも
たし料姫山の酒飲神めの

西吹ら水ま川く宮めらし
ちら存越の川もそく
思山谷ふちよの出了君山州
出代くの日は指打くね
日とらへき夜く国のくれて
河有よこそりしき所給紙
今在宮の利くも雨く中り乃山
言ゆららつくし山妹よ宮山く
指しも山は進くにぞらしも
特らのれ多も女く

探題

一羽立て寝ぬを見えぬ鴨の声　孤屋

弔ふ窓の志や門に如く声の秋　北岡

鶯言ふや声ふる立る儀にて枕　圭化

かしこの桜し成るふ飄々と月　京彬

神ふ恐や雨の御地にて降る　芦雀

雨や人里を把那しあ田と　守胡

寺ふ何をしも道花の鴨　東令

鶯の三月や猶の竹の花の糸　花波

陽炎やいとしきを枝ひ　巳律

もし陽ゐや菊のにくる峰ぬ立　丈桂

鶯言や峰の山吹もたるも　松化

恨しいの京も松しに飄　里帆

寺代しに声ふさ那しれ　竹小

京長に姉も乱ふふ鶯涼ぬ　序

参兵

陽炎やいとしして遊ひ　巴律

門田ちゆき月の夕新　花波

わきぬ新京ふとさてら何く　有

声のかちちにと端つき　京妙

すみのふきし大事の御縁日　福徳
飼して宮山祥くり　東分
帰りしやしき手つかさ男ふり　六所
新所も中も学所も中ら　松葉
まけよりし中より下しぬ松住り　松竹
松備の賴のかたにわすれみ身　青葉
お乃門もあれはこそ江の咲門も　千歳
和歌詩もまの絵山　了桃
伊山が乃種順朝め初宿を花　松花
讃ともふ花の階乃内從

古今の御例あての徒か若ち
志の紛は澤氏友あちらく
あかさきに三條の松の日向く
二万の京のゆきに浮くらく
植松の旅からかつく徳多さき
仲井もいけふるらし開
ち絵に備らしぬあきし亂
沈落の作かつき文子右利
ちゑをとしの集つの篤かりに
几中もてら次のたまに終く

お米略

ねるの影のわきおちてある月　月池

啼しらぬをいきたの秋　南

仝

いやさんわさ竹の節茂　杉化

独なかへて夕月もおもし　仝

仝

ちまむし芭蕉の風の音高　東流

読くれ国も月の世の秋　仝

仝

光のぬる影の涼しや月の夕　杜芳

芝のおしく家も隠れに　仝

仝

こゝ程ゆまゝらぬ白雲秋け　是化

新しき雲の月ゆこゝ㒵　仝

仝

末の体ゝしく秋けし　了枕

月ともなのわすれ来む　仝

仝

名月の秋やこゝ程の雲もなし　竺水

ちらちらと[illegible]の[illegible]しさの[illegible] 柳[illegible]

秋[illegible]しも[illegible]枝 [illegible]

仝

月の影の[illegible]といふさはし 春月

[illegible]秋の[illegible]し 仝

仝

秋や[illegible]しのおもて涼し 杜[illegible]

[illegible]ちらちら柳[illegible] 仝

仝

[illegible]涼しさ 梅[illegible]

一 月の[illegible]に[illegible] 杖 仝

[illegible]

[illegible]甲斐も[illegible]涼し 杖の[illegible] [illegible]

月の[illegible] 仝

仝

[illegible]との[illegible]の[illegible] [illegible]

[illegible]月[illegible]色やら 仝

米亭撰

ちるかぬこぬかの今雪を通されし　孤吹

雪の空しも剣しく消え　素仙

霜の中に流れきよくいろしま

今ても絶えぬ韻の行くの

惜しめしき海の面の月ぞ哀

冷しく寒さしく出るゆかしくる

清蔵のも我田ゆ喜藤をけさし

忠清所おみよ夢の花

一よしよ萱糸兔の耳もたて

あきつこそとまるの日横姫

おのれしらのむれて落しく

紫の秋ア、風のおくらん

小ろき景郷の浅の声きられ

通る雪仲子の噂しかけ口

も日見ゑの冬枕の名

名ちらほらとの残ゑとう秋ふ

入句

守るまかやみアの雨と葉に水り　志

帰る年に宮も庭かく渦なる　東今

酒入取りとあるに新たに記　愁史